

# コミュニケーションとしての身の上相談

## － 身の上相談にあらわれる価値意識の変化 －

池田 知加\*

身の上相談を相談者と回答者のコミュニケーションと見なすことによって、身の上相談が相談者の「悩み事」から現代社会における「不幸」を示すデータであるだけでなく、相談者と回答者の応答関係にあらわれる価値意識などを示すデータでもあるということに注目する。身の上相談は相談者が一方的に「悩み事」をうち明けるものではなく、回答者が相談内容に対して何らかの回答をするものであり、そこに現代社会における価値意識や日常道徳や新たな価値をつくりだす過程を見いだすことができるのではないだろうか。そのことを確認するために、本稿では相談者と回答者の応答関係にあらわれる成功イメージや結婚、仕事などに対する意識とその変化について分析し、今日における社会意識の新しい局面について考察したい。また、相談内容における二つのタイプ（手段について尋ねるものと承認を求めるもの）に注目することによって、今日の身の上相談に共通してみられる特徴について考察したい。

キーワード：身の上相談，承認，悩み方，個人化，D.リースマン，R.N.ベラー

### はじめに

本稿の目的は主に新聞紙上に掲載された身の上相談をデータとして、相談内容とそれに対する回答内容の変容を通して、今日における価値意識や社会意識の動向について考察することにある。とりわけ将来の目標や結婚・仕事についての相談に対する回答内容に注目することによって、成功や幸福のイメージがどのように変化しているのかについて考察したい。

かつて、見田宗介氏は「現代における不幸の諸類型」において、当時の読売新聞に掲載された身の上相談からいくつかの「不幸の諸形態」について分析したことがある。その際、「出世

街道」を歩むことや「女の幸福は家庭にある」といったような固定化された成功や幸福のイメージが広く受け入れられることによってかえって「不安や焦燥」が生ずるという逆説について論じていた。

しかしながら、今日において、「出世街道」を歩むことや「女の幸福は家庭にある」というような固定化された幸福や成功に対する価値意識はもはや広く受け入れられているとはいえないのではないだろうか。成功や幸福のステレオタイプのイメージにかわって、幸福や成功というもののイメージが多様化している状況に特有の「悩み事」があるのではないだろうか。

本稿では、読売新聞に掲載された身の上相談を中心に、1962年から1998年までの各種の身

\* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

の上相談における相談者と回答者のコミュニケーション的なやりとりから、価値意識の変化について分析したい。

### 1. コミュニケーションとしての身の上相談

身の上相談とは、ある悩み事を抱える相談者、その悩み事にまつわる問題の解決方法を提示する回答者、そしてそのやりとりを読む読者から成り立っている。このような身の上相談は相談者の悩み事の内容を分析することによって、日常生活の中で人々が何を求めているかについて分析するためのデータとなる。また、相談内容の変化を分析することによって、相談や回答の中に「時代の気分」や「時代が作り出した不幸の型」を見いだすこともできるだろう<sup>1)</sup>。

見田氏によれば、身の上相談は「現代生活の日常性のさりげない表情の底にあるものを、われわれのまえにつきつける」<sup>2)</sup>データとなる。つまり、身の上相談は相談者の「悩み事」の内容に注目すると、日常生活における様々な不幸の諸形態を示していると考えられる。たとえば、見田氏は1962年の身の上相談の相談内容から、「出世街道」や「結婚」から脱落するということが「不幸」であるという社会的な観念が広く共有されており、幸福や成功がそのようにイメージされることによって、そこから逸脱することが不安や焦燥をもたらすと論じていた。

このような見田氏の社会意識研究の背後には、ステレオタイプとしての幸福や成功から逸脱したことによって生じるような「不幸」に集合的な苦悩の源泉を見だし、しかもその源泉を社会変革の可能性として位置づけるという目

標があったといえるだろう。

確かに、見田氏の分析にみられるように身の上相談は多様な不幸の諸形態を直接的に示すデータとして扱うことができる。しかしながら、本稿では身の上相談が多様な不幸の諸形態を示すデータとして扱うことができるだけでなく、ある相談者の「悩み事」に対して回答者が回答するという相談者と回答者の相互的な応答関係をしめすデータとしても扱えることに注目したい。すなわち、身の上相談は相談者がもっぱら自らの「悩み事」をうち明けるという一方的なものではなく、回答者がその「悩み事」に対して何らかの解決策を提示したり、具体的な行動を指示したり、問いかけに対して問いを返すことによって問題点を自覚させることを試みたりするという、相談者と回答者のコミュニケーションとして理解することもできる。

たとえば、鶴見和子氏は身の上相談を相談者と回答者の「コミュニケーションのもん<sup>ま</sup>だい」として分析している。鶴見氏によれば、相談者と回答者の間の「くいちがい」を分析することによって、両者の間にコミュニケーションが成立しているか、成立していないかを示すデータとなる<sup>3)</sup>。

このように身の上相談は相談者と回答者におけるコミュニケーションの成立・不成立を示すデータとしても扱うことができるが、ここでは身の上相談を相談者と回答者の双方にとって望ましいと考えられる将来や幸福を示すデータとして取り扱いたい。なぜなら、回答者の提示する将来像や幸福像といったものは、何よりもまずある相談者の「悩み事」に対する応答であるという身の上相談の構造上、回答者は自身にとってのみ望ましいだけでなく、相談者にとっても望ましいと思われる将来像や幸福像を提示

するものと考えられるからである。

たとえば、進路についての相談に対する回答に注目すれば、相談者と回答者の双方にとってどのような将来が望ましいと考えられているかということを理解することができる。そこにはステレオタイプとしての成功イメージが反映されている場合もあれば、ステレオタイプとしての成功イメージとは異なる価値意識が反映されている場合もある。すなわち、身の上相談における相談者と回答者の応答関係のなかに現代社会における価値意識やステレオタイプの成功や幸福のイメージやそれらに代わる新たな価値を形成する過程を見いだすことができるのである。

また、身の上相談は新聞や雑誌というメディアに掲載されることを前提にしていることから、回答者は相談者だけでなく多数の読者の存在を想定した上で、ある程度普遍的な回答を提示すると考えられる。そこで、回答者は相談者にとってのみふさわしい答えを提示するだけでなく、相談者以外の多数の読者も納得すると思われるような答えを提示することになるだろう。それはある悩み事や問題に対するもっとも望ましいと思われる解決策やある種の規範や今日における日常道徳などを示しているものと考えられる。したがって、ここでは身の上相談を対面的なコミュニケーションにおいて特有にあらわれる価値意識を示すデータではなく、社会的に共有される価値意識を示すデータと見なし、相談者と回答者のコミュニケーションにあらわれる価値意識とその変化について考察したい<sup>4)</sup>。

以下、進路や結婚・仕事に関する相談内容とそれに対する回答を分析することによって、相談 応答関係にあらわれる価値意識の変容につ

いてみていきたいが、本稿では読売新聞に掲載されている「人生案内」から、1978年、1988年、1998年分の身の上相談を中心に、朝日新聞に掲載された「男の人生相談」(1996年)から18件、および『週刊朝日別冊：現代ニッポンにおける人生相談』(1997年)に掲載されたいくつかの相談を取り扱う<sup>5)</sup>。

## 2. 進路相談：人生の目標

### (1) 成功イメージの多様化

#### ほんとうに学歴は必要なんですか？

読売新聞に掲載されている「人生案内」の相談内容をみると、家族に関する悩み事や生活に関する悩み事の他に、自分自身に関する悩み事として、進学すべきかどうかに関するもの、将来就きたい職業に関するものなど進路や将来についての相談が継続的に掲載されている<sup>6)</sup>。見田氏が分析した1960年代初頭の読売新聞にも大学進学についての相談や自分の将来に関する相談が掲載されている。見田氏が指摘しているように、そこでは「一流大学 一流企業」の「幹部コース」というようなステレオタイプの成功イメージが固定化されており、相談者にとっても回答者にとってもそうした価値意識が「何の疑いもなく前提されている」<sup>7)</sup>。

たとえば、「受験勉強から逃避したいばかりに就職 [... したものの...] 就職してはじめて大学へ行きたい」と思い悩むようになったある相談者に対して、その回答者は「友達がみな大学にゆくから [... という理由で大学に進学することは...] 虚栄というもので決してよいことではありません」と答えている。しかしながら、回答者は続けて「日本の現状では実力よりも学歴で曲がりなりでも大学を出ていないと信

用されない[...ということがあるので...]親の田畑を売り払ってでも大学を出るといふ冒険をする価値はあります」(62/6/1木々高太郎)と述べている。また、「大企業に就職したものの」出世コースから外れてしまったことに悩んでいるある相談者に対して、その回答者が「[相談者が]おっしゃるように大企業の中ではなかなか役付きにもなれず、男としても足りないかもしれません」(62/11/24小系のぶ)と答えているように、「役付き」になれなければ「男としても足りない」という価値意識を双方が共有している。

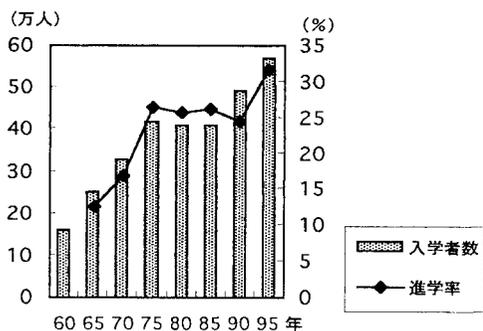
このように1960年代の初頭において、相談者と回答者はともに「大学を出る」ことが人格的な信頼を得るための手段であるという意識や、「一流大学」を卒業し、「一流企業」に就職し、「幹部コース」を歩むというような成功イメージを共有していた。「出世ルート」が容易に実現されない状況にあっても、当時の身の上相談においては「出世」の実現に向かって努力することは自明のこととして考えられる傾向にあった。たとえば、「一流大学を卒業[...したが...]出世街道から脱落」したことに悩んでいるある相談者に対して、その回答者は「なにごととも自分の力量の不足[...]努力によってかち得なければならぬものと大覚悟をして、二流三流の大学卒業生と同じつもりになって励まされては...」(62/8/23木々高太郎)と答え、さらに努力することによって「出世街道」を歩むことをすすめている。

70年代後半になると、人生における重要な通過点であった大学進学への価値は微妙に変化してくる。1978年の「私はただならぬ女[子]高生」という相談において、相談者は「まわりの友だちは受験の最後の追い込みにしるぎをけ

ずって[...いるのに対して...]学校からの推薦ですでに英会話の専門学校」への入学が決まっていることに悩んでいる。相談者は「受験勉強もせず進学し[...]何の苦労もなく道が敷かれてしまった[ことで...]競争がきびしいといわれる世の中へ飛び出したとき[...]乗り切れるものかどうか」について不安を感じている。ここでは、相談者にとって大学に進学することは将来の目標を実現するための手段ではなく、「きびしい世の中を乗り切る」ための試練としてとらえられている。これに対して回答者は、「いまの日本の社会がみな大学に行くことを前提としているのがおかしく、学者になる人以外は高卒で十分[であって...]私は私なのだ」と自信」(78/3/3戸川エマ)を持つべきであると答えている。

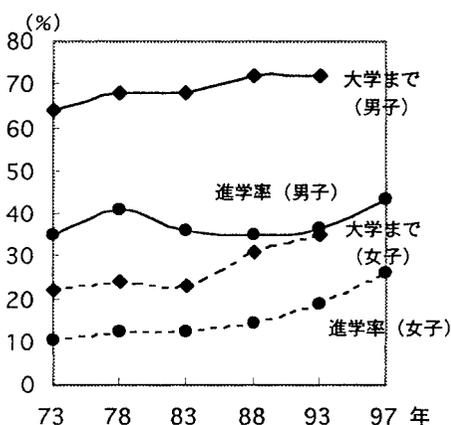
ここで回答者が述べている「みなが大学に行くことを前提にしている」ということに関して考察すると、確かに1960年頃から1970年代半ばにかけて大学入学者数・大学進学率は急激に増加している(表1参照)。また、NHK放送文化研究所の『現代日本人の意識構造【第四版】』(日本放送出版協会、1998年)によると、受けさせたい教育程度として、「男の子に受けさせたい教育程度」に限っていうと、1978年においては68%が「大学まで」と答えている(表2参照)。しかしながら、実際の大学進学率と照らし合わせてみると、1978年における大学進学率は男子において40.8%、女子においては15.9%と必ずしも「みなが大学に行くことを前提にしている」とはいえない(表2参照)。したがって、「みなが大学に行くことを前提にしているのがおかしい」という回答者の感覚は、実際の大学進学率に呼応していると思われるよりも、むしろ「出世ルート」を保証する

表1 大学入学者数と進学率



文部省『学校基本調査報告書』(1997年)より作成

表2 受けさせたい教育程度と大学進学率



『現代日本人の意識構造』及び『学校基本調査報告書』より作成

手段としての学歴や大学進学とは異なる価値に対する関心の芽生えとしてとらえることの方が妥当であろう。すなわち、「一流大学」を卒業し、「一流企業」に就職し、「幹部コース」を歩むというような成功イメージが変化しているのである。なぜなら、「人間には学校でのペーパーテストの上には現れなかったいろんな能力や可能性」(78/1/26小系のぶ)があり、「経済的[...]社会的地位[...]だけでなく[...]それ以外の『価値』もある」(78/7/8戸川エマ)と意識されているからである。つまり、「[国立大出や私立大出ということに意識しすぎることは

...]エリート意識」(78/7/27小系ノブ)の現れであり、重要なことは「学歴はなくてもいいけれど、誠実で、真剣に人生に取り組む姿勢と気概」(78/9/15小山いと子)なのである。

このように70年代後半の身の上相談において、大学へ行くことが成功するための第一歩であるという固定化した成功イメージは変化しているが、学生は将来の目標のために勉強に励み、悩み事があっても勉強だけは怠けないでいることが重要であると考えられている。相談内容をもても、相談者は受験勉強に専念するか、あるいは好きな人のことを考えたり、クラブ活動に励むかといったように二者択一をしなければならない状況に悩んでいる。回答者はこのような相談に対して、「入試が終わるまで[...]好きな人に[...]心のうちを打ちあける[のは待ち、今はむしろ...]彼女のために受験に成功するように、ひたすら勉強にはげんで」(78/1/12戸川エマ)、「恋の悩み[...]に思い乱れている心に水をかけて、まず大学入試に全力投球」(78/4/26沢地久枝)するように指示している。また、「これからの人生を送るために必要な心の支えが失われて[...]悩んでいても...]肝心の勉強だけは怠けない」(78/4/21平井富雄)で、「将来、希望する職業に就きたい[...]という目的がある...]のならば、勉強をおろそかにすべきではありません」(78/1/27平岩弓枝)と考えられている。

これに対して、80年代後半になると将来の目標のために(受験)勉強に専念することだけではなく、今現在の生活を充実させることもまた重要であると考えられるようになってきている。なぜなら、長い人生の中で、自分の好きなことを追求することが将来の目標のためのより確かな手段であるからである。すなわち、(受

験) 勉強以外に「何か熱中できるものを見つけ  
[れば,それがかえって]受験へのエネルギー」(88/5/28早乙女勝元)になるのである。  
そして,大学は人格的な信頼を得るための手段  
ではなく,社会へ出るときのための試練でもなく,  
「教養を深め,青春を楽しむ」ところであり,  
「自分のしたいことを熱心に,しかも楽しみ  
ながらやっていくこと」(88/6/24深沢道子)  
が重要なのである。

相談内容をもて,学校生活において,勉強  
だけに集中することができない状況にあるもの  
が多くみられる。70年代後半と比較すると,  
80年代後半の身の上相談には学校における人  
間関係に悩んでいるもの,不登校やイジメに悩  
んでいるものが増加している<sup>8)</sup>。「[友人が]  
陰で悪口いいふらす」(88/2/25),「友人[が]  
できずついに休学」(88/6/20),「話し下手で友  
だちいない」(88/12/5)などの学校生活におけ  
る人間関係についての悩み事に対して,回答者  
が強調することは,学校生活においても「実社  
会」と同様に多様な人がいるということを認識  
し,それに対する寛容性を持つことである。つ  
まり,「人は,みんなそれぞれ違って[...]い  
いところもあれば,そうでないところも」  
(88/2/25早乙女勝元)あるのだから,「自分と  
違う人が大勢いることに気づくためにも」  
(88/12/5深沢道子),「個人の違いは違いとし  
て認めあい,理解し合える」(88/6/20落合恵  
子)ことが重要なのである。

このように人々の多様な個性を認識し,それ  
に対する寛容な心を身につけるからこそ自己の  
独自性は確保され,自分の目標をもち,自分の  
ことについて責任をもつことができるようになる  
のである。そしてそれが「大人になる」とい  
うことの意味なのである。すなわち,「自分で

[試練を]越えていくところに真の生きがいがある」(88/8/19早乙女勝元)のであり,「自分  
は何をしたいのか」をじっくりと考え,「自分  
の好きなことを自分で始める」(88/9/10,4/22  
深沢道子)ことが重要なのである。そして「自  
分のことは自分で選択して,自分で責任をと  
る」(88/5/9落合恵子)こと,「自分のことは自  
分で責任を持つことが大人への第一歩」  
(88/6/3藤原てい)なのである。

90年代後半の身の上相談において,見田氏  
が分析した1962年の身の上相談と比較する  
と,大学へ進学することについての価値意識は  
大きく変化し,「学歴の優秀さ」はむしろその  
人の人間性に対する嫌疑をもたらず場合もある。  
今日では「学歴だけの優秀さ」だけでは物  
足りないのであり(98/3/30大森一樹),「学業  
成績が優れていることと,人間的に優れている  
こととは,直接には関係ない」のである  
(98/6/25三木善彦)。つまり,大学へ行くこと  
が人格的な信頼を得るのだとしたら,それは  
「そこ[大学]に入学し,出るまでの『努力』  
への信用[...]であり...」生きる姿勢そのものへの  
評価」(98/4/18落合恵子)に基づいているの  
であって,ただ大学に行くこと自体に基づいて  
いるのではないのである。

このように今日では,大学へ行くことだけが  
人格的な信頼を得るための手段であり,成功への  
第一歩であるという「成功」イメージは解体  
するとともに,大学へ行く以外の進路にも同様  
に価値があり,各々の目標にみあった進路があ  
るということが意識されるようになってい  
ると思われる。したがって,現在においては,80  
年代後半の身の上相談において強調された人々  
の多様な個性や進路についての認識は定着して  
いると見なすことができるだろう。それだから

こそ、自分の進路を決めるということは「生きる姿勢そのもの」を表現するものでなくてはならないのである。

## (2) 多様化の帰結

### 「悩み事」についての「悩み事」

将来の目標が一元的なものではなく、個々人によって多様なものであると認識されるようになる一方で、回答者はどのような相談に対しても具体的に回答することが困難になり、確信に満ちた回答をすることにためらいを感じているようにも思われる。たとえば、今日の進路に関する相談に対して、次のような回答が目される。

#### 【相談】 アニメの仕事に就きたいが...

25歳の独身男性です。専門学校を卒業後、今の会社に就職して6年目。これまで親の勧める進路におとなしく従ってきました。

1年ほど前から、仕事に追われるまま、ただ年を取っていくだけの人生に疑問を持ち始めました。自分が本当に好きなアニメーションを専門学校で勉強し直して、アニメの元絵を描くアニメーターになりたいと考えています。

しかし、アニメーターの多くは給料が低いなど、労働環境が厳しいことを知りました。仕事以外にアルバイトもして、生活費を補っている人もいます。

アルバイトの募集も25歳までの所が多く、私の年齢ではアニメーターだけで生活できるようになるまで、アルバイトで食いつなぐのは難しそうです。夢を追うのにも年齢制限があるのでしょうか。ご意見をお

聞かせ下さい。

#### 【回答】

仕事に追われるまま、ただ、年を取っていくだけの人生に疑問を持ち、自分の好きなこと、本当にやりたい仕事に進もうというのは、それはそれで素晴らしいことですし、かっこいい生き方でしょう。とはいえ、アニメーターという職業の労働環境は厳しいのですが、それを仕方ないと肯定するつもりはないにしても、現実であることは否定できません。

ただ、夢というものの前にはいくつものそうした現実の壁があるものです。親の敷いたレールをただ進んできたあなたにはわからないのかもしれませんが、それらの壁を乗り越えるなり、突き破るなりしなければ、夢に届かないことは自明のことなのです。そして、それに必要なのは知恵と勇気と力であり、それらのない人に夢を実現する資格はないと私は思います。

もちろん、夢を追うのに年齢制限はありませんが、夢を実現するには、そういう資格制限があることぐらいは25歳にもなったら知っておいて当然でしょう(98/7/22大森一樹)。

この回答によれば、ある専門的な職業に就くことを目指すにあたって、自明なことは、いくつもの「現実の壁」がある中で、「それらの壁を乗り越えるなり、突き破るかしなければ、夢に届かない」ということである。そのために必要なことは学歴や専門的な資格といった具体的なものではなく、「知恵と勇気と力」という多様に解釈のできる抽象的なものである。

将来の夢の実現にとって必要なことが「知恵と勇気と力」であるというこの回答は、相談者に何らかの行動を指示するものではなく、相談者にその内容の解釈を委ねるものである。相談者の進路や将来に対して、このように回答者が抽象的で多様に解釈することが可能な答えを提示しているのは以下の三つの理由があると思われる。

一つは、「一流大学」を卒業し、「一流企業」に就職し、「出世街道」を歩むというような固定化された成功イメージが解体し、将来の目標が多様化していることである。

二つは、固定化された成功イメージが解体され、各々の目標にみあった成功があるということを知り、回答者が意識していることである。つまり、成功イメージが多様化するにともなって、回答者は相談者の将来に対して、確信を持って具体的な進路を提示することができないのである。なぜなら、どのような進路を選ぶのであれば、それが成功するかどうかは相談者の個人的な努力や意志や成功観に委ねられるからである。たとえば、「一流企業に就職する」ことは「将来の幸福を約束する」かもしれないし、しないかもしれない。それが幸福を導くかどうかは相談者次第なのである。

そして、回答者が具体的な行動を指示することができない三つ目の理由は、相談内容そのものを反映しているからである。つまり、相談者の「悩み事」が抽象的であるために、回答者もまた抽象的な回答をするようになるのである。この点が今日の身の上相談に共通してみられる特徴であると考えられる。

そこで進路や将来に関する相談に二つの類型があることに注意したい。一つは、自分の夢の実現のために必要なこと(手段)について尋ね

るものである。もう一つは、自分の夢についての回答者の意見を求めるものである。今日の身の上相談においては後者のような回答者からの承認を求める相談がしばしばみられる。上記の相談も、ある(専門的な)職業に就くために必要なことや、その職業に就くための手段について尋ねているというよりもむしろ、ある職業に就きたいという願いそのものについて回答者からの意見や承認を求めているといえるだろう。そこでは、その職業を希望することそのものに関して「どう思いますか」と問われているのであり、その職業に就くための手段について「どうすればよいのでしょうか」と問われているのではない。すると、具体的な解決方法を問われていない回答者は、その職業に就くための手段を提示するのではなく、回答者に自分の意志を確認することをせまったり、「あなたらしい」夢を追求することをすすめるといったように、いわば、答えにならない答え、当たり障りのないかようにも解釈可能な答えを提示せざるを得なくなっているのである。

このような二つのタイプの相談の違いは相談者が感じている不安の内容からも理解できる。自分の将来の夢を実現するための手段について尋ねるような相談において、相談者が感じている不安は現実的な条件や手段を確保するために必要なものの欠如などから派生している。

これに対して、相談者からの承認を求めるような相談において、相談者が感じている不安は自分の悩み方の自信のなさから派生するような不安である。つまり、相談者は自分の「悩み事」の内容についてそれがそもそも「悩み事」として成立するかどうかについて不安を感じているのである。それは回答者から「悩み事」であると承認されなければ「悩み事」にならない

ような「悩み事」なのである。

このような後者のタイプの身の上相談に現れている意識は、D. リースマン(David Riesman)が分析した他の人々からの「承認(approval)と方向づけ(direction)」を求めるといった特徴をもつ「他人指向型(other-directed type)」の典型的な一つの形態として理解することができるだろう。リースマンのいう「他人指向型」とは、1950年代前後のアメリカの「若い年齢層、大都市、上層階級」に特有の行動様式や意識現象を類型化したものであるが、それは特定のアメリカ人についての分析にとどまるものではなく、産業化が一定の段階に達し、物質的な生活が豊かになった社会における人々の意識現象についても適合する類型であると考えられている。したがって、「他人指向型」とは今日の社会における人々の行動様式や意識現象についての分析でもあるといえるだろう。

リースマンによれば、人生の目標や成功や幸福といったものが明確な内容を持たなくなったときに、「他人指向型」という意識現象は生じる。なぜなら、内面化された明確な目標に向かって邁進するような「内部指向型(inner-directed type)」とは異なり、成功や幸福が確固とした内容をもたなくなると他者の意見や経験を意識するようになるからである<sup>9)</sup>。したがって、今日の身の上相談においては、将来の目標が多様化するに当たって相談者は自らの目標を確信するために回答者からの承認を求めていると考えることができる。回答者はあくまでも自分の意志で自分の将来を決めることを示唆するが、進路の選択に迫られた相談者は自分の意志の確かさを回答者に承認してもらうことを求めているのである。すなわち、「他人指向

型」とは他者の意見や指示に依存しているのではなく、他者からの解釈に依存しているのである。

このような身の上相談にあらわれる「他人指向型」という意識は他者への単なる同調主義を示すものとしてとらえられるだけでは不十分であり、リースマンが「自らの内心の声よりも、他の声によって導かれるような現代における大多数の人々において、他人指向性を生み出す条件そのものが、『残された救済者[自律性]』を生み出すこともある<sup>10)</sup>」というように、「他人指向型」から「自律性(autonomy)」が派生すると述べていることから理解される必要があるだろう。

他者からの承認を求めるといった「他人指向型」の特性は、しばしばリースマン自身が注意を促しているように、外面的なものへの同調として解釈され、「内心の声」に立脚する「内部指向型」が自律的であると解釈される傾向にあった。しかしながら、自らの「内心の声」を確認するためには、逆に他者の声に耳を傾けざるを得ない。なぜなら、他者からの承認によってはじめて自らの「内心の声」は保証され、自律性は確立されるからである。そうであるからこそ、「他人指向型」は「自律性」を確立するための条件となるのであろう。

このようにリースマンは「他人指向型」から「自律性」が生じると論じているが、「自律性」を「その社会の行動面での規範に同調する能力を持ちながら、それに同調するかしないかについては選択の自由を持つ<sup>11)</sup>」ものと規定している。そして、リースマンは1950年代前後のアメリカ社会において「自分の選ぶ様々な選択の道をつくっていくことが可能」であり、それは「自律性の生まれる余地がより大き

くなるということの意味する」<sup>12)</sup>と述べている。

リースマンがいうように、「自律性」が他の人々によって方向づけられながらも、「選択する自由を持つ」ものであるならば、人々のとりうる選択肢が多くなるにつれ、「自律性」の条件は満たされていくのではないだろうか。さらに、他者からの承認を求めながらも、人々は自律的であることを望まれるようになるのではないだろうか。すなわち、一方でステレオタイプの成功イメージが多様化するにもなって、自らの「悩み事」についての承認を求める相談がみられるようになり、他方でそのような相談に対して回答者は相談者の個人的な努力や成功観に委ねるような回答をせざるを得ないのである。

以下では、将来の目標が確固としたものでなくなり、個々人によって多様なものになるにしがって相談者自身で自らの成功の内容を定義していかなくてはならなくなるのと同様に、結婚生活や仕事についての身の上相談においてもまた、選択肢が増大することによって人々がどれほど自律的であることを望まれるようになったかについて考察したい。

### 3. 結婚生活・仕事に関する相談：

#### 幸福と生き甲斐

##### (1) 女性の幸福

##### 夫の行状に悩む妻の訴え

今日の身の上相談をみれば、人生の目標が個々人によって異なるものとして認識されるにもなって、相談者は「悩み事」の正統性についての回答者からの承認を求めるようになっていくが、幸福のイメージもまた個々人によって

異なる多様なものとして考えられていることがうかがえる。たとえば、見田氏は1962年の身の上相談において「家のための犠牲となって婚期を逸した」ことによって生じる焦燥がしばしばみられたと指摘しているが<sup>13)</sup>、今日では「婚期」について悩んでいるような相談はほとんどみられない。

それは「女の幸福は家庭にある」というイメージが普遍的な幸福のイメージとして「何の疑いもなく前提されている」ものではなく、幸福の一つの形態という程度でしか意識されていないからであろう。

それと同時に、「婚期」について悩むということ自体が「悩み事」として承認されないからでもあるだろう。たとえば、数少ない「婚期」についての相談に対する回答をみると、1998年の「人生案内」に掲載された「婚期」についての相談では娘の婚期についての父親の焦燥が語られている。「なかなか結婚しない二女[...に対して...]いい年をして結婚もせず、父親に恥をかかせている」という気持ちを抱いていたという相談者に対して、回答者は「親に恥をかかせているというあなたの反応は、時代遅れということになります」(98/8/25三木善彦)と答えている。また、1997年に掲載された「29歳で未婚[...であることが...]恥ずかしい」という相談に対して、その回答者は「独身でいることが恥ずかしいというあなたの考え方がふるいと思います」(97/6/27瀬戸内寂聴)と答えている。

このように未婚であることについての「悩み事」に対してそれが正統性をもたないと答えられるようになると、未婚であることについて悩むことができなくなるだろう。したがって、実際に相談者が未婚であることについて不安を感

じていたり、悩んでいたとしても、それは「悩み事」として現れにくくなるだろう。

では、「人生案内」にもっとも多くみられる結婚生活に関する相談において、どのような変容がみられるだろうか。1998年の「人生案内」の一つに「夫の浮気」についての相談が掲載されているが、見田氏も指摘しているように「夫の行状に悩む妻の訴え」は「人生案内」における典型的なものである。

たとえば、1970年代後半における「人生案内」では、夫の浮気に悩んでいる相談者に対して、「耐えて、通り過ぎるのが一番賢明」(78/1/13沢地久枝)、「お二人とも、まだ若いのですから[妻=28歳, 夫=25歳], 夫は必ずまた自分の胸に戻ってくる、と信じて努力してくださるように」(78/2/4小山いと子)と回答者が答えているように、相談者に夫の行状に耐えることを指示している。さらに、回答者は浮気をしている夫にではなく、その妻である相談者に対して、「あなたの方にも問題はなかったのか」と問いかける場合もある。つまり、「夫の浮気」という問題は、相談者が「妻として家庭内のやすらぎや楽しみ、あたたかさなどをなおざりにした」(78/5/30小糸のぶ)ことにむしろ原因があるのではないかと考えられているのである。

このように70年代後半においては、浮気、ギャンブル、浪費などの夫の行状について、妻である相談者には、「ご主人をたてる家庭生活」、夫に対する「少々の努力、献身、譲歩」を心がけ、自分自身の態度を反省することなどが指示されている(78/3/24, 3/4, 5/29, 6/23など)<sup>4)</sup>。

1980年代後半になると、「夫の行状」に悩んでいる相談者に対して回答者は夫の行状に耐え

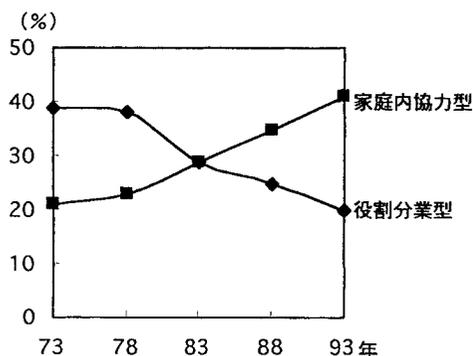
ることよりも、むしろ夫からの自立を確立した上で夫と対等な関係になることをすすめている。すなわち、夫の行状に「耐えるだけが人生ではない」(88/11/10三枝佐枝子)のだから、「あなた自身の生き甲斐をこそ考えるべきであって」(88/8/1早乙女勝元)、そのために「[ひとりで暮らすことの]覚悟をしっかりと」もっていなければならない。そして、まずは夫から「石にかじりついてでも自立する[ように、そして...] そうなった時初めて、夫とあなたとの間に対等な関係」(88/1/11三枝佐枝子)が成立するのである。

1970年代後半と1980年代後半の回答を比較すると、夫婦間の対等な関係についての考え方が変化していることがわかる。1978年において、「夫の浮気」に悩んでいるある相談者に対して、その回答者は「夫婦は互いに平等の立場でそれぞれの義務を果たし、権利を求めるべき」(78/1/11平岩弓枝)であると答えている。ここでは夫婦が対等な関係になるためには、それぞれの義務を果たすこと、つまり、夫は仕事、妻は家庭に専念するといった性別役割分業に基づく義務を果たすことが必要であると考えられている。これに対して、1988年においては先にみたように、妻が夫から経済的な自立を確立した上で互に対等な関係になることが重要であると考えられている。

このような「人生案内」の回答における夫婦間の対等な関係についての考え方の変化は、「理想の家庭像」の変化、とりわけ「役割分担型」の大幅な減少と呼応していると思なすことができるだろう。NHK放送文化研究所による『現代日本人の意識構造』によれば、ちょうど70年代後半から80年代前半にかけて、父親は仕事、母親は家庭に専念するというような「役

割分担型」が大幅に減少し、父親も母親もともに家庭のことに気をつかうというような「家庭内協力型」が増加している(表3参照)。

表3 「理想の家庭像」の推移



『現代日本人の意識構造』(1998年)より作成

では、現在の「人生案内」においては、「夫の行状に悩む妻」の相談に対してどのような回答がされているだろうか。今日では、「夫の浮気」といったことは「人に相談するような問題ではない」と答えられるかもしれない。なぜなら、「夫の浮気癖[...は以前から承知していたことであり...] 厳しいことを言えば、すべてはあなたの責任」(98/6/14瀬戸内寂聴)だからである。

このような回答は極端だが、「夫の行状に悩む妻」の訴えに対して「夫に生活態度を改める」(98/4/3鍛冶千鶴子)ように働きかけてもだめならば、「理由はどうであれ、夫婦が信頼できなくなったのなら、離婚を選択肢の一つ」(98/4/12大森一樹)と考えることは当然であるし、「お二人ともまだ人生半ばですから離婚してやり直した方がすっきりして有意義だと思います[...]」(98/9/25里中満智子)といった回答が典型的にみられる。結局のところ、夫の行状や経済的な問題がどうであれ、「あなたがこれからどう生きていかれるのか。それはもと

より、あなた自身が決めること」(98/4/4落合恵子)なのである。

このように今日では、「夫の行状」に対する解決策はそれに耐えることや経済的な自立を確立した上で離婚することだけではない。離婚は「選択肢の一つ」であり、まずは夫に対する自分の気持ちを再確認すること、夫や子どものためではなく、何よりも自分自身のために夫に対する愛情を自分に問いかけることを回答者は相談者に指示している。つまり、「『彼 [= 夫] を愛している、必要です』という言葉がどこまで本当なのか真摯に自分で確かめるべき」(98/8/13大森一樹)であり、「夫にとって自分が必要なかを問うよりも、まずあなたにとって夫は必要なパートナーなのか、を考えて」(98/5/31落合恵子)みる必要があるのである。

以上から、幸福イメージが多様化するにしたがって「夫の行状に悩む妻の訴え」に対する回答の特徴は、それに耐えることから、夫からの経済的自立と離婚へ、さらに今日では夫に対する感情の自己確認(と自己決定)へと変容していると思われる。

## (2) 男性の生き甲斐

### 仕事は生き甲斐か?

今日の身の上相談では、「女性の幸福は家庭にある」という固定化したイメージが拘束力をもたなくなり、独身でいることが「悩み事」として承認されなくなると、女性に自分の意志を確認し、どのように生きるかを決定することが求められるようになってきているが、男性の幸福についてはどのように意識されているのであろうか。「人生案内」は男性からの相談が少ないため、そこから直接、男性の幸福について考察す

ることは難しい。しかしながら、女性に夫の行状に耐え、「あたたかい家庭」をつくることに専念することが求められているときには、男性に仕事に専念することが求められていたと考えることができるのではないだろうか。

たとえば、「人生案内」には「仕事ばかりで家庭を顧みない夫」について悩んでいる相談がある。これらの相談に対して、60年代後半において、回答者は「仕事を生き甲斐とする男性こそ、立派な本物の男性」(69/8/6福島慶子)であり、「一生懸命仕事をする[...ことは...]有能な男性の責任感のある立派な考え方」(68/2/7小山いと子)であると答えている。

このようにかつては男性の生き甲斐は仕事にあると考えられていたが、その反面で「仕事が生き甲斐」とはなりえない状況にあるような相談もある。成功イメージが固定化していた60年代において、左遷や配転による仕事内容の変化に対する不満、職場での人間関係についての悩みがあっても、かわらず努力して「出世ルート」を歩もうとすることは疑われることのないことであった。しかしながら、今日において男性は仕事に専念するだけでなく、余暇時間における様々な活動を積極的にこなすことなどについても意識しなければならなくなっている。

たとえば、「[以前に職場で受けた]イジメの思い出が怖く出社拒否」に悩んでいるある相談者に対して、その回答者は「まともに会社に勤めようと思わぬことです。[...なぜなら]貴方もそれ以外では楽しい事、興味のある事をきってお持ちだろう[から]」と答えている(『週刊朝日別冊』89頁)。また、「仕事中にパソコンゲーム[...をするような...]上司からのいじめ」に悩んでいるある相談者に対して、その回答者は「[その上司と同じように]六時に

なったら、さっさと机を片づけて[...]疲労とストレスを取り除くこと」を指示している(『週刊朝日別冊』82頁)。

これらの相談 応答関係にみられるように、今日の身の上相談では、仕事に専念し、働きすぎるよりも、仕事以外に「興味のある事」を持ち、仕事中には「パソコンゲーム」をし、定時になったら「さっさと机を片づける」ことが望ましいと考えられる場合もある。なぜなら、仕事に専念するだけでは疲労やストレスがたまる一方であり、仕事以外の余暇活動についても重視されているからである。たとえば、朝日新聞に掲載された「人生相談 男もつらいね」(1996年)では、「営業の一線から資料室に配転」したある相談者に対して、その回答者は「よりすてきな人生を」歩むことをすすめている。

#### 【相談】 営業の一線から資料室に配転

45歳のサラリーマン。20年以上にわたる営業の一線で働いていたのですが、仕事で失敗して、資料室に配転させられてしまいました。

資料室でやる仕事は、ほとんどありません。毎日、お茶を飲み、新聞を読んで、ただ夕方が来るのを待つ日々です。時間がとても長く感じます。これまで営業の第一線で働いてきた私には耐えられません。

以前は残業の連続で、家を顧みず仕事をしてきました。早く帰ることができるようになって、家族の中ではかえって居心地の悪さを感じます。人生が終わったような感じさえします。

#### 【回答】 よりすてきな人生を

バリバリの営業マンがいきなり窓際となると、ショックはさぞ大きいことでしょうね。

仕事を続けるべきか、納得できる転職が可能なのか、家族の了解は得られるのかなど、すでに色々お考えのことでしょう。本当に大変です。

社会が従来の成長適応型から不況適応型の仕組みに移行する間は、あなたのような状況に置かれる人もたくさん出てくるでしょうね。

でも考えてみれば、残業ばかりで家族とのかかわりも少ない、今までの生活は、果たして幸せだったのでしょうか。仕事の評価ではなく、人間的魅力とか人間関係の豊かさで評価された方が、より幸せかもしれません。

読書、講座、趣味など、暇さえあれば、安く楽しむことができます。そのうちもっとすてきな新しい人生が始まるかもしれません。

残業ばかりでやがて過労死とか、もっと高齢になってリストラに見舞われるよりは、はるかにラッキーだったと思うのですが(1996/12/19味沢道明)。

この回答によれば、今日では男性にとって「よりすてきな人生」とは仕事に専念することではなく、「読書、講座、趣味」を楽しむことである。これは1960年代における男性にとっての生き甲斐とは大きく異なっている。すなわち、固定化された成功イメージが解体することによって、仕事以外の余暇時間における様々な活動が重視されるようになってきているのである。

男性にとって「仕事が生き甲斐」であると考

えられていれば、「出世ルート」から脱落することや、職場での人間関係に悩んでいることは深刻な「悩み事」として意識されるだろう。しかしながら、仕事だけではなく、それ以外の多様な活動もまた生き甲斐であると考えられるようになる。配転にともなう仕事内容の変化や職場での人間関係について悩むことが深刻な「悩み事」として現れなくなるのではないだろうか。つまり、そうした悩みが「悩み事」として承認されなくなるのである。この回答にみられるように、仕事の内容が変化し、仕事量が減ってかえって「ラッキー」なのである。

以上、結婚生活や仕事についての相談に対する回答の変容から、今日において男性と女性にとって望ましいと考えられていることが理解できるだろう。まず、女性においては、夫への気配りを怠らずに、「あたたかい家庭」をつくることに専念するというような伝統的な役割からも、夫の扶養からも解放されることが望ましいと考えられている。男性においては、仕事に専念するという役割から解放され、余暇活動における新しい自己実現が望ましいと考えられている。つまり、女性においても男性においても、かつて望ましいとされていた役割から解放され、何よりも自分の人生を自分のために生きること、自分の人生を自分で規定することが身の上相談の回答において重視されているといえるだろう。

U. ベック (Ulrich Beck) にしたがっていうなら、このような身の上相談の回答の変容過程を女性と男性の双方における「個人化 (individualization)」といえるだろう。ベックによれば、「個人化」とは「一人一人がみずからの生活歴を自分で創作し、上演し、補修」<sup>15)</sup>していくことを意味している。つまり、現在で

は生活水準が向上し、社会保障や教育制度といった福祉国家の諸条件が整うにしたがって、産業社会の基本的な枠組みであった階級や性別役割分業などへの組み込みから解放され、女性も男性も自分自身の人生を自ら規定することが可能になっているのである。身の上相談においてしばしば述べられている「あなた自身の人生を決めるのはあなた自身です」という回答は、このような「個人化」を示しているといえるだろう。

以下では、身の上相談において自分の人生を自分で決定することをすすめるような回答が多くみられるなかで、自分の人生を自分で決定することが可能になった状況における「悩み事」について考察したい。さらに、自らの人生を自分で規定していくという意識がどのような方向に展開していくかについて考察したい。

#### 4. 新しい結びつきの探求

今日の身の上相談において、どのような目標を持ち、どのような生き方をするかについての選択が相談者の意志決定に委ねられているような「個人化」を示す回答がしばしばみられる。たとえば、「自分の進むべき道」について悩んでいるある相談者に対して、その回答者は次のように答えている。「自分の位置がわかっているあなたが、選ぶべき道がわからないというのは、あなたがどのような生き方をしたいのか、あなたの人生の目的は何なのかが問題なのでしょう。その答えを他人に求めるのは、他人の価値観、行動に任せて生きることではないでしょうか。苦しくても、人それぞれが自分で答えを出すものだしと言えません」(98/5/19大森一樹)。

この回答にみられるように、今日においては自分がどのように生きるのかについて、自分の価値観にしたがって「人それぞれが答えを出す」ようにしなければならない。すなわち、今日では人々が組み込まれると同時に「意味供給源」でもあった階級や核家族や性別役割分業といった従来の結びつきから解き放されるにしたがって、自分の生き方について自ら規定していかなければならなくなっているのである。これは一方で伝統的な生活様式からの解放を意味するだろう。たとえば、相談者は誰と結婚するかについて、あるいは、いつ離婚するかについて、「家の犠牲」になることもなく、世間体や他人の意見に従う必要もなく、自分の意志で決めることができるのである。

しかしながら、他方で、「個人化は、一人ひとりの自由な意志決定に基づいていない」<sup>16)</sup>ということにベックは注意を促している。生活水準が向上し、教育制度や労働市場や社会保障の推進といった福祉国家の諸条件を背景に「個人化」過程は進展しているが、そこでは「個人をひとりの個人として、もっと正確に言えば、一人の個人としてのみ権利付与(と義務)の担い手にさせている」<sup>17)</sup>のである。このような「個人化」過程の条件を背景に、あらゆる選択が諸個人の意志決定に委ねられる結果として、その選択にともなう帰結もまたすべて個人の責任に委ねられるようになるという側面を「個人化」はもっているのである。たとえば、結婚生活や職場において耐え難い状況にあっても、その結婚やその仕事を選択したのは相談者である。したがって、その責任はすべて相談者に帰せられるようになる。

R.N.ベラー (Robert N. Bellah) たちは『心の習慣』において、経済的な成功や失敗などのあ

らゆる問題を個人の責任としてとらえようとするような信念を「個人主義」に由来すると見なしている。その結果、アメリカ社会は分断され、「他者への義務の感覚の欠如」がみられるとベラーたちは述べている<sup>18)</sup>。これに対して、彼らは人々が相互依存的な関係にあるような「共同体」を重要視している。ベラーによれば、「共同体とは、社会的に相互依存関係にあり、共に討議や決定に参加し、共同体を定義づけると同時に共同体によって育成されるもする特定の実践をともにする人々の集団」<sup>19)</sup>である。しばしばコミュニタリアンと称されるベラーの立場は、「自律性」を何よりも価値あるものとして考えるようなりベラリズムを批判するところにある。そこで、ベラーは自律性だけでなく、「連帯(solidarity)」や「責任(responsibility)」といった実質的な価値の重要性を訴えるのである<sup>20)</sup>。

ベラーの議論の背後にはアメリカ社会における所得の深刻な両極化、道徳心の衰退、アメリカ力を分断させる個人主義的な成功観などに対する危惧があるが、その議論はアメリカにのみ限られるものではないだろう。なぜなら、身の上相談の回答からも理解できるように、今日の日本においても自律的に自分の人生を選択し、決定するということが重視されているからである。上記の回答のように、「他人の価値観、行動」にしたがうのではなく、自分自身の価値観にしたがって自分の生き方を選択することが重視されているのである。

しかしながら、自分自身の「価値観」に依拠しながら、「自分の進むべき道」を選択するだけではある種の空虚感や不安を免れることができないのではないだろうか。ベラーによれば、「価値観」を語ること自体に矛盾がある。なぜ

なら、「そもそもそれは価値すなわち道徳的選択を語っていないからである。この言語は完璧に空虚で負荷がない即興の自己というものの存在を仮定しており、個人的リアリティーや社会的リアリティーを、そしてとりわけ個人と社会とを結ぶ道徳的リアリティーを見えなくしている」<sup>21)</sup>。

たとえば、身の上相談では結婚生活において夫婦の関係が破綻しながらも、自分自身のために自分の人生を生きようとして、趣味や自己実現に向けて活動したり、夫からの経済的な自立を確立したとしても、何かしらのむなしさが残ると訴えている相談がある。

このような悩みに対して、1978年の「人生案内」に掲載されたある相談に回答者は「視点を変えること」をすすめている。すなわち、「人間は所詮は孤独なもの」ということを受け止めることをすすめている(78/9/26小山いと子)。また、1988年の「人生案内」に掲載されたある相談においても、回答者は相談者に視点を変えることをすすめている。すなわち、「考えようによっては、結婚生活というものは、日々が男と女の闘い」(88/4/13三枝佐枝子)なのである。

ベラーによれば、こうした「孤独」や他者との「闘争」という視点は自律性に価値をおく「個人主義」の文化に由来しているが、それだけでは「人生の基本的なリアリティーや他者との相互依存関係を妨げることになる」<sup>22)</sup>。たとえば、1998年の「人生案内」において、夫の浮気について悩んでいる「友だちも多く、趣味[も多い]」というある相談者は、「好きなことをして生きるのが私の人生としても、切ないものが残ります」(98/11/28)と訴えている。

この相談に対して、回答者は以前のように

「孤独」や「男と女の闘争」という考え方を受け入れることを相談者にすすめるのではなく、「その思いを、まずは夫に伝えるしかないでしょう」と指示している。「人間は所詮は孤独」で、「結婚生活というものは、日々が男と女の闘い」と考えるのではなく、この回答は夫という他者の存在へ関心を向けることをすすめている。なぜなら、相談者は「自分の好きなことをして生きる」からではなく、「夫への愛情と信頼、共に生きているという実感と、これからも共に生きていくのだという確かな思いがあればこそ[...]頑張ることができた」(98/11/28落合恵子)からである。

この回答が相談者の自律性だけを重視しているのではなく、妻である相談者と同様に結婚生活の当事者でもある夫の存在の意味についても言及していることに注目したい。今日の身の上相談においては、相談者の自律性が重視されるとともに、他者の存在の意味を問い、他者との関係において相談者の人生の意味について言及しているものがしばしばみられるようになってきた。たとえば、上記の回答は、結婚生活が互いに独立した存在が孤立しながら成り立っているのではなく、二人の関係そのものによって存続していることを示している。そして、回答者は離婚するかどうかを決めるのは相談者の意志決定に委ねられるとはいいいながらも、その前に配偶者および子供と話し合いをすること、そして相手に対する「信頼と共感と尊敬」を再確認することを重視している。

さらに、今日の進路相談の中で、「自分の好きなことをして生きる」ことを指示するのではなく、行動をとみなわないような抽象的な回答をしているのではなく、一つの実質的な価値を提示している回答もみられる。

**【相談】** 大学中退するかどうか悩む

21歳の女子大学生です。大学を中退するかどうかで悩んでいます。

二年生の後半から勉強内容に興味を持てなくなりました。退学したいと思い始めたものの、何となく単位だけ取って四年生になってしまいました。

卒業研究も全く興味がなくなることなので手がつかず、この3年半の間、何をやって来たのだろうか、無意味に思えてなりません。高校も中退したかったのに、いつも決断できない自分にいらだちます。

親に授業料を払わせておいて退学したいとは言い出しにくく、申し訳なく思っています。今、別のことに興味を持ち、専門学校に進学したいのですが、またやめたくなってしまうかもしれないと思うと、ためらってしまいます。とりあえず、大学は卒業すべきなのでしょうか。

**【回答】**

中退したかったのに高校を出てしまった。大学も迷いながら四年生にまでなってしまった。専門学校に進学したいがまたやめたくなってしまうかもしれない。よほど純粋なのか、自己懷疑的なのでしょうか。

あと半年ですから、がんばって卒業するのがよいと思います。卒業したからどうというわけではありませんが、それがご両親をもっとも喜ばせる方法だと思います。今のうちに優柔不断ではどうせたいしたことは何もできませんから、確固たる意志の芽生えるまで当面は、親孝行を心がけるのがよいのではないのでしょうか。親の意向に沿う

ように生きて行くのです。

親孝行は日本古来の素晴らしい美德ですから、それに従っている限り、これまでのように思いわずらう必要はありません。

人間は自らの過去を肯定しない限り、力強く生きて行くことができません。現状では、親孝行はあなたの半生を正当化する唯一の道でもあるのです(98/10/8藤原正彦)。

かつては「日本古来のすばらしい美德」の名のもとで、「家の犠牲」となることによって生じる不幸が身の上相談においてしばしば問題となっていた。そこからみれば、「親孝行」という「日本古来のすばらしい美德」を提示するこの回答は、従来は不幸を招く一つの原因になりうるとも考えられていたものをむしろ逆に奨励している回答である。しかしながら、自己の進路に悩んでいる相談に対して、抽象的で内容をともなわない回答とは異なり、この回答は少なくとも実質的な価値に導かれた一つの具体的な行動を指示している。それは必ずしもかつてのステレオタイプの幸福や成功のイメージにそくしたのではなく、相談者の「悩み事」の内容に応じて、回答者が回答するというコミュニケーション的なやりとりそのものから形成された価値である。ここに現在の身の上相談に反映されている社会意識の新しい局面があるのではないだろうか<sup>23)</sup>。

自己の人生を自らの意志で決めるということは、その人生に他者の存在の意味や他者の意見などが全く無関係なのではない。自らの人生を自分で決めるということは、本来ならばそれと同時にあるはずの他者への責任というものがないはずであるが、人々の多様性に価値をお

き、自律性や自己実現を重視することになった結果、他者に対する配慮といった視点がしばしば抜け落ちている傾向にあったのではないだろうか。

しかしながら、上記で提示された「親孝行」という回答には、相談者以外の他者に対する責任や配慮の感覚がある。相談者は「日本古来の美德」であれ、他者への「信頼と共感と尊敬」であれ、何らかの実質的な価値をとまなう基盤がないところで自己の生き方を決定することはできないのではないだろうか。そして、その選択の基盤がただ自己にあるだけでは「生きることの実感」を得ることはできない。ここに、ペラーが主張するような「共同体」重視の考え方の源泉をみることができよう。すなわち、成功や幸福イメージの多様化のもとでの「他人指向」的な意識から、自己の生き方についての自律的な選択と意志決定の重視にいたった意識は、「個人化」が進展するにつれ、かえって再び他者の存在の意味について問わざるを得なくなっているのである。

## まとめ

本稿では身の上相談における相談者と回答者のコミュニケーション的なやりとりから、そこにあらわれる価値意識の変容について分析してきたが、以上を次のように要約することができる。

第一に、進路についての相談において、1960年代前半の身の上相談にみられた成功のステレオタイプのイメージが解体するにしたがって、将来の目標にとって必要な手段について尋ねるような相談にかわって、自分の「悩み事」の正統性についての承認を求めるような相

談がみられるようになっている。そこで回答者は説得力をもった回答をすることが困難になり、相談者の個人的な努力や成功観に依拠するような抽象的な回答をせざるを得なくなっている。

第二に、結婚生活についての相談に対する回答においては、「女性の幸福」が「あたたかい家庭」を維持することから、夫からの経済的な自立と自己決定を重視するにいたっている。さらに、仕事についての相談においては、「男性の生き甲斐」が仕事だけではなく、仕事以外の余暇活動や自己実現に向けての様々な活動が強調されるようになっている。すなわち、女性においても男性においても、かつては望ましいとされていた役割から解放され、自分のために自己の生き方を決定することが重要視されている。

第三に、1980年代頃より、自分の生き方についての自己決定が重視されている一方で、それだけでは「むなしさ」を感じたり、「自分の進むべき方向」がわからないといった相談がみられるようになっている。そのような相談に対して、回答者は「親孝行」であれ、「他者への配慮」であれ、何らかの実質的な価値を提示することなくしては、具体的な行動を指示することができなくなっている。そしてそうした実質的な価値は、かつての固定化された成功や幸福イメージにそくしたのではなく、相談者と回答者のコミュニケーション的なやりとりを通して形成されていくのである。

#### 註

- 1) 針谷順子「不幸も世につれ 身の上相談の変遷」(『思想の科学』1990年5月号)54-59頁。
- 2) 見田宗介『現代日本の精神構造』(弘文堂、

1965年所収、発表年は1963年)3頁。

- 3) 鶴見和子「身上相談の論理」(思想の科学研究会編『芽』1953年、9・10号)30-41頁。
- 4) 本稿で扱った身の上相談は全て一回性のものであるため、回答によって相談者の価値意識が実際に変化したかどうかについては知ることができない。ここでいう「価値意識」とは、相談者のものではなく、相談と回答の応答関係にあらわれる「価値意識」であり、相談者の価値意識が実際に変化しうかどうかについては考察していない。
- 5) 本論では以下の身の上相談を取り扱う。

#### ①『読売新聞』『人生案内』

回答者(敬称略):木々高太朗(生理学者・作家)、福島慶子(評論家)、戸川エマ(評論家)、平地久枝(作家)、小池のぶ(作家)、平井富雄(精神科医)、小山いと子(作家)、平岩弓枝(作家)、鍛治千鶴子(弁護士)、藤原てい(作家)、落合恵子(作家)、早乙女勝元(作家)、深沢道子(カウンセラー)、三枝佐枝子(評論家)、大森一樹(映画監督)、三木善彦(大阪大学教授)、保崎秀夫(精神科医)、藤原正彦(数学者)、里中満智子(漫画家)、瀬戸内寂聴(作家)

掲載数(各年度末の読売新聞社による統計より)。詳細は各年度末の『読売新聞』の記事を参照していただきたい。

・1978年度(1978年1月-11月末日)

採用対象になった投書 1683通(男性393通、女性1290通)

・1988年度(1987年12月-1988年11月30日)

掲載投票数 305通(女性276通、男性29通)

#### ②『朝日新聞』(大阪)「人生相談 男もつらいね」18件

回答者:仕事や家族のことで悩む男性の相談に「男・悩みのホットライン」などの活動をしている「メンズセンター」のメンバーによる回答。詳細は朝日新聞(大阪)の記事(1996年8月15日夕刊)を参照していただきたい。

③株式会社人生相談社(企画・編集)『週刊朝日別冊:現代ニッポンにおける人生相談』朝日新聞社、1997年。「企業トップ・著名人」および一

般公募からの相談と、それに対する回答が掲載されている。

\*相談・回答内容の引用箇所後の( )は掲載日、および回答者の氏名である。回答者の敬称はすべて省略させていただいた。なお、引用箇所内の[ ]は筆者の補足である。

- 6) 相談内容の傾向(下表)は読売新聞社の統計による。
- 7) 見田宗介28頁。
- 8) 80年代頃より、家庭内暴力、登校拒否、イジメの相談が急増している。読売新聞社『人生案内』1988年、39頁参照。
- 9) David Riesman with Nathan Glazer and Reuel Denny, *The Lonely Crowd: A Study of the changing American Character* (Yale University, 1950, renewed 1989) pp.137-140。(邦訳 加藤秀俊は1961年の簡約版、『孤独な群衆』みすず書房、1964年、125-127頁参照)。なお、本論文の中で引用したリースマンおよびベラーの文献については、邦訳書を適宜参照させていただいたが、それと必ずしも一致していない。
- 10) David Riesman, *Individualism Reconsidered and other Essays* (Doubleday Anchor, 1963) p.101。(邦訳 牧野宏、大井孝『個人主義の再検討』東京ペリカン社、1974年、177頁)
- 11) *The Lonely Crowd*, p.242。(邦訳226-7頁)
- 12) *The Lonely Crowd*, p.257。(邦訳240頁)
- 13) 見田宗介32頁。「『婚期』『売れのこり』『三〇

歳』という言葉が暗黙に前提にしているような『女の幸福』をめぐる画一主義的なイメージが、なくもがなの焦燥を生み出していることを考えさせられる。」

- 14) つねに相談者に「耐える」ように指示しているのではない。どの年代においても、常軌を逸したと思われる夫の行状、たとえば日常的な暴力やアルコールやギャンブルにのめりこむことによって完全に破綻した生活などに対しては、家庭裁判所や警察などの公的機関へ相談に行くことが指示されている。
- 15) Ulrich Beck, Anthony Giddens, Scott Lash, *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in Modern Social Order* (Polity Press, 1994) p.14。(邦訳 松尾靖文、小幡正敏、吐堂隆三『再帰的近代化』而立書房、1997年、30頁)
- 16) *Reflexive Modernization*, p.14。(邦訳32頁)
- 17) *Reflexive Modernization*, p.15。(邦訳21頁)
- 18) Robert N. Bellah, Richard Madsen, William M. Sullivan, Ann Swidler, and Steven M. Tipton, *Habits of the Hearts: Individualism and Commitment in American Life* (University of California Press, 1985), "The House Divided", update ed., 1996, vii.
- 19) *Habits of the Hearts*, p. 333。(邦訳391頁)
- 20) "The House Divided" (Bellah, 1996, update ed.) xxviii, Robert N. Bellah, Richard Madsen, William

### 相談内容の傾向

	生活	夫婦	恋愛・結婚	青少年	健康				
1968年	36	26.5	17.5	12	8	*生活：家族，肉親，経済的な悩みなど			
1973年	42	18	16	11.5	12.5	*青少年：進学，就職，性，容姿，性格など			
1978年	30.4	23.6	15.3	16.6	14.2				
	自分自身	家族以外	配偶者	家族	離婚				
1983年	39.3	11.2	13.6	33.6	2.3				
	自分自身	家族以外	夫について	親	姑・舅	子	兄弟姉妹	妻	その他
1994年	25.8	14.9	22.8	6.3	4.3	12.6	6	1	6.3
1995年	28.1	20	16.9	6.8	9.2	7.8	4.7	5	4.4
1996年	30.5	16.3	20.7	6.4	6.8	8.8	4.1	1.4	5.1
1997年	28.5	14.4	16.8	11.7	4.4	9.7	5.4	2.7	6.4

M. Sullivan, Ann Swidler, and Steven M. Tipton,  
*Good Society* (Vintage Books, 1992) p.6.

21) *Habits of the Hearts*, p.80. (邦訳96頁)

22) "The House Divided", ix.

23) 残念ながら、本稿では今日における社会意識の新たな局面があるのではないかという指摘にとどまっているが、それがどのような内容をもつのかについては今後の課題としたい。